

## エッセネ (Essene) とゼーロータイ (Zelotai)

杉 田 六 一

ユダヤ史上マカビア時代からヘロデ王時代それから紀元70年ユダヤ滅亡の頃までパレスチナにエッセネ (Essene) と呼ばれる特異な宗教団体があつた。エッセネの研究はこれまでに文献史料によっては殆んど研究し尽くされたといつてよいであらう。それは資料の全部がヨセフォスの『ユダヤ戦記』 *Bellum Judaicae* および『ユダヤ古代記』 *Antiquitates Judaicae* の中の記述とフィローの *Quod Omnis probus liber* (善良の人は自由である意) および『ユダヤ人弁疏』 *Apologia pro Judaica* の中の記述 (紀元20年頃) に依つてゐるからである。Plinius, Solinius, Porphyry, Epiphanius, Eusebius のエッセネについての記事はエッセネ研究には価値が無いといわれている。1947年クムランでいわれる「死海の書」が発見されて長い間忘却の彼方におかれていたエッセネ研究が一躍脚光を浴びるに至つた。禁慾的脱世間の平和主義的集団であつた。持たぬものそして持つたものはその持つ財を全部教団に贈つて無産者となり勤勞し共産主義を順法し集団の構成員となつて死海近くに教団生活を営んでいたのであつた。この宗教団体の組成された同時代にゼーロータイと稱した熱狂的な一団があつた。ヘロデ王が歿した直後ガリラヤ人ユダがガリラヤでローマに反旗を翻えしセポリスで王の武器庫や倉庫を掠奪しセポリスを焼いた。この革命集団が増強するのを見てローマ軍はこれらの反抗者を捕え処刑したり追ひ払つた。ローマ打倒の意慾を燃やしてユダヤ法厳守を第一義として異教を征服し神裁政治の実現を期してゐたこれらの人々の熱狂振りは異常なものがあつたので、カナイム Kanna'im またゼーロータイと呼ばれた。自らゼーロータイと恰も一教

派であるかのように自称したのはユダヤ戦争の火蓋を切ってからであった。サドカイ、パリサイ、エッセネに次ぐ第4の教派としてヨセフォスはこの烏合の衆のような一団をエッセネと同じくその著述の中に挙げたのであった。メシア出現新エルサレムの顕現を幻に描き反ローマの衝動に藉られた民衆は多数この集団に加わったのであって、パリサイ派の中からも加わったものもいた。大体はこの時代に希望を失った無産大衆がこの集団の構成分子であった。メシアが出現してエルサレムが世界の首府となりローマに集った世界の富はエルサレムに移りユダヤ人の全体が幸福となり不幸は世界から消えると信じ、メシア出現を促進するためには先ず、ローマと戦うことであると決意したのであった。ユダヤでは時代を同じくして平和穏和主義のエッセネと他方に対照的な戦闘的急進主義のゼーロータイが現われた。紀元70年のエルサレムの落城、マサダ要塞陥落、キュレネのユダヤ人反乱、時代が少し降ってバルコクバの反乱があって、ゼーロータイは全滅した。ここにエッセネについて語り、次いで、ゼーロータイを述べ、そして、両極端にあるゼーロータイとエッセネが何故に時代を同じくして現われ、遂に、ユダヤ人はその拠る国を失い離散し世界の流浪の民となったかを考えてみたい。なお、その行動と思想の本源にあったメシア思想の一端を語って本論考を結びたいと思う。

**エッセネ** エッセネはギボンの『ローマ帝国衰亡史』の中に「財産の共有はプラトンの想像力を楽しましたが厳格なエッセネ宗派の間にある程度存在したということを挙げている」（村山勇三氏訳『ローマ帝国衰亡史』岩波文庫）かつて、英のディクインジーはエッセネについてのヨセフォスの記述を読み「偽りだ。作為の偽りだ。実に悪意の偽りだ。」といてエッセネの存在を疑った。エッセネの教義は秘密であったのでエッセネ教団に入団したもののほか知るよしもなかったからと思われる。ヨセフォス自身にしても、短い期間しか教団の中になかったので、その奥義を体得するには至らなかったと思われる。況してフィローは死海に近いエンゲディ Engedi には行っていないので、その誌したことは聞

き書きであった。エッセネの真相を把握することは難かしい。クムラン文書の中の「義の教師」がもしエッセネであったとすれば、エッセネ教義に触れることになるが、未だ、仮説としてであって、断言はできない。当時幾多のエッセネと思われるような教団が存在していたようであって、ガスターも『死海の書』の中の教団の生活その規律教理はヨセフォスやフィローの誌したものと甚だ類似しているといっている (Theodore H. Gaster: *The Dead Sea Scripture in English Translation*. pp.93—107)。また、デュボンゾンメル教授は死海に近いアイン・フェシュカ Ain-Feshka で1947年発見された「新契約」教団はエッセネと断じている (A. Dupon-Sommer: *The Dead Sea Scrolls*. Translated by E. M. Rowley pp.85—96, 1956. 同氏 *The Jewish Sect of Qumran and Essenes*. Translated by R. D. Barnett. pp.1—13, 1956)。エッセネはヨセフォスに依ればパリサイ、サドカイに次ぐ第3のユダヤ宗派であるがパリサイもサドカイも政治的宗教団体であったが、エッセネは政治とは交渉を持たなかった。

エッセネは聖書にもラビ文学にも記されていないので「ヘブライ史の謎」といわれている。エッセネは紀元2世紀前よりは古くないと考えられている。ヨセフォスの『ユダヤ古代記』にマカビアのヨナタン (前161—144) の記事中に初めてその名が挙げられている。エッセネはパリサイ派のハンディム Chasidim の分派といわれる。その時代は政治が社会苦救済の力のないのを知り政治から離れて曠野に隠遁して新組織を作ったのであった。ヨセフォスやフィローの時代には4,000人もこの教団に属しておりパレスチナ内の村落や時に都会地にも散在していたという。エッセネの名称の起源も定かではない。シリア語の敬虔という意味があるという説もある。ヨセフォスの『ユダヤ古代記』Ⅷ15:3:12に Essa という地名が出ているがエッセネの名の起源と附会するむきもある。何れにしても他からこの教団に与えた名称であってこの名称に関しては25以上の異説があるという (D. Ginsburg: *The Essenes. The Kabbalah* pp.27—30, 1956)。エッセネから派生してキリスト教と混合したエビオ

ン宗派 Ebionites という派があったが紀元 220年にはローマに伝道したといわれる。肉食を禁じ洗礼を行い星占術もその教義に織込み主としてヨルダン河東方面に行われ 7 世紀にイスラームに合するまで続いたという (Duncan Howlett: *The Essene and Christianity*, 1957.)。このエビオン宗派の他ペラ Pella のユダヤ人キリスト教会エレカイト派、サンプシアス派などの中にエッセネの教義が生きていたとも考えられる。エッセネは動物の犠牲を献げないで彼らは敬虔な心こそ真実の犠牲であると確信していた。これらの人々は大体村落に住んでいたが都会住居者の中に根を下ろしている罪惡に染まるのを免れるために都市を避けた。彼らは都会人との交際はその心靈に恰度悪疫性の雰囲気によって疫病が感染するように恐ろしい感化が及んでくるのを知っていた。彼らの或るものは農業に従い、また他のものは平和に役立つ手工業に従って自他を利した。金銀を蓄積することなく、まして、利潤を獲得するために宏大な土地を手に入れるというようなことはなかった。しかし、生活上当然必要な品は用意した。熟慮を重ねた挙句の行動として無一文となり一片の土地も持っていないで全人類の中に殆んど唯一人で立っているが素晴らしく富んでいると考えていた。何故といえば彼らは満足感を持っていた。節約こそは事実そうであるが正に溢れる程の富であると判断していたからである。投げ矢、投げ槍、短剣、兜、胸当、盾についていえば、これらの製作者は一人も見出せない。なお、また、武器兵器を作りまた戦争に関係する仕事に精を出すものも見出せなかった。たとえ平和的のものでも容易に悪用される恐れのあるものの製作者は見出せなかった。卸にしても小売にしても貿易にしても、およそ商行為を営むなどという考えを持ったものはなかった。貪慾の誘いとなるとして斥けたのである。彼らの中には一人の奴隸もいなかった。皆自由であって相互に奉仕し合っていた。彼らは奴隸所有者を非難したが奴隸制は人類平等の法を犯す不正、自然法を無効にする不敬と考えたためである。自然は母の如く全ての人を同じように産み、育くみ、純粋な兄弟として創造した。決して名目ばかりではなく、全く真実からである。しかるにこの親類関係は悪性

の貪慾の勝利によって混乱した。この貪慾が親近感の代わりに疎遠を、友誼の代わりに敵意をもたらしたのである。彼らは哲学は徳を積むに当って不必要とし、その論理の方はおしゃべりの議論家に、物質界の方は人性の把握できないものとして空想論者に委せたが、神の存在と宇宙の創造を哲学的に論ずる部門だけは保留した。倫理の方は彼らは非常に熱心に勉強し彼らの祖先の律法を規準と考えていた。これは天来の靈感なくしては心に依っただけでは感得できないものとした。常日頃この律法は教えられたが、特に、第7日に教えられた。この日は神聖な日として全ての仕事を休んで彼らがシナゴグと呼ぶ聖なる場所に集合した。シナゴグ内に列をなして老幼各々序を守り聴聞に都合のよいように坐を占めた。それから一人は聖經を取り声を挙げて読む。そして、聖經に非常に詳しい者が出て章句中の意味の難かしいものを解釈した。哲理研究の大体は譬喩の方法で説明したのであった。彼らは敬虔、神聖、正義、家をまた町を治める方法、真に善なるもの、悪なるもの、無関心なるもの、選択せねばならないものをどういう風にして選ぶか、選んではならないものをどういう風にして避けるか、要するに彼らの定めた規準としてこれら3、即ち神を愛し、徳を愛し、人を愛することを教えられた。彼らの神を愛することは多くの実証即ち誓言をなさないことで、正直さで、そして神こそ全ての善の少しも悪のない本源であることを信ずることで表現された。彼らの徳を愛することはその金銭、世俗の地位また快樂に心を煩わされないこと、自制心、忍耐、その上儉約、簡單生活、満足、憐憫の情、律法厳守、不動の信念、これらに類する素養で表われた。彼らの心を愛することはその慈悲心、平等観、そして、僅かの語でもあれば何んとか適用されるが語では表わせない友情中に表わされた。即ち、第1にその住居であるが全ての人に共用されない住居は無いという觀念から自分自身所有の住居を持たなかった。その上彼らは共同の生活をしたので彼らと信仰を同じくするものには何処からの訪問者にも住居は開放されていた。彼らは一つの出納所を持ち共同の支弁をした。その衣類は共同に保管され、その食糧は共同食という制度で運営された。如何なる

他の共同体でもここ以上に共同生活の行われたのを見たことがない。全く予期通り完全のものである。彼らが1日働いて得たものは私有財としなくて共同資産に納められた。かくして得られたこの利得はこれを用いたいと望むものに分けられた。病人は何も提供することができないからといって粗略にされない。既に共同資産の中に病者の看護費は入っていたからであった。それ故に充分確実なより大きい財富からその費用は出るからであった。老人に対してもまた真実の子供がその両親を遇すると同じように尊敬を払われ、面倒が見られるからであった。多くの人々の真心から生い先き短い老人達は手厚く遇されるからであった。以上のようなのがギリシア語の術学の影響から離れた一つの哲理によって生れた道德の競技者達であった。この哲学こそはその入門者に見上げた行為を自ら実行させる。この哲学によって決して捉われない自由が確立される。我々はここにこそ、その証拠を見た。権力者で種々の場合国に君臨したものの数は多い。各々の性質とその執政の形式は違う。あるものは野蛮とも思われる程度に野獣狩に兇暴性を発揮して興味を覚える。これらはあらゆる残忍なことを行う。大量に臣民を生きたままで料理人のように四肢をばらばらに切断して虐殺する。民事を検問する裁判官がまた同様な災厄を持ち込んで人民に臨み、その手を休めない。平静な穏かな語を仮面として被っているが、含むところの性質は隠し切れない。彼らの後には各都市を通じて彼の不徳と非道の記念碑として、その犠牲者の忘れ難い惨禍が残る。しかし、これらの極端に兇悪なるもの、また、深く反逆心に染った偽善者もここに記したこのエッセネ即ち聖い人々の集団に対してはいいがかりもつけることはできなかった。これらの人々の高く優れているには抗し難いものがあった。彼らは皆自制のできる生れながらの自由人として遇しその共同食と口にいえぬ友情感を賞揚した。これこそ完全に優れた幸福な生活の最も明瞭な証拠であった。なお、エッセネの間には幼児も少年も青年もなく成年者および既に老境に達した人達のみで肉慾煩惱に悩まされない。また情慾に駆られることのない誠実な絶対の自由の境地に入った人々によって成っていた。彼らの自由の試練はそ

の生活である。彼らの中一人もおよそ私物と名のつくもの、家屋であれ、奴隷であれ、領地であれ、家畜であれ、財産となる機具、設備品は一切私有を許されない。彼らは私有財産を投げ出して皆の共同資産に投じた。彼らは同じ様式の共同生活をなし共同食事をして絶えず共同の安寧幸福のために勤労した。団員各々異なる仕事に従事し競うように各々倦まず熱情を持って業務に励み熟したと思うと冷めるなどということなく、寒暑別なく骨惜しみしないで働いた。彼らは日の出前に仕事に従事し日没に至って漸く止めた。彼らの中のある者は農耕者で熟練しており、他の者は牧畜者で家畜を飼育した。また、ある者は養蜂者であった。更らに手工業の名工もいた。生産されたものは規定によって選んだ管理人に渡した。管理人はこれを受けて必要品を購入し共同の生活をし共同食をとり満足した。彼らは共同食ばかりでなく一様の粗末な白衣を用いた。一人に属するものはまた全体に属すと考えられ全体に属するものは各自のものであると考えられていた。彼らの中誰か病気に罹れば共同貯蔵の中から薬が支給された。全体の看護と関心を持って世話され、恰も沢山の子供を持っているようであったばかりでなく、しかも良い子供に恵まれているようであった。フィローの伝えるところでは彼らは結婚を排し禁慾生活を守ったといっている。ヨセフォスは彼らは結婚生活を軽視しているが他人の子供を養い勉強させたといっている。また、教団内で結婚生活を営んでいたものもあるような記述もある。彼らは敬虔で日の出前に卑俗の事柄については絶対に語ることなく祈を唱える恰も太陽の昇るのを祈願するようであった。この派に入門を許されるには1ケ年間彼らと同じ生活様式で過ごすよう規定されていた。小さい斧と白衣と腰紐が与えられる。この期間禁慾が守られるという証明がついた時、水の潔斎と一緒にするよう仲間に加えられた。しかし、まだ仲間との同居生活は許されない。意志堅固なることが示され、なお2年間その気性が試され入門の資格ありということになれば入門が初めて許された。そして、共同食に触れる前に夥しい誓をなさなくてはならなかった。即ち、神に敬虔であること人に正しいこと、他人の命令であっても人に害を与えな

いこと、常に悪を憎み正しいことに味方し全ての人に真実を示し、特に権威あるものに忠節を尽すこと、およそ神の助けなくしては支配権を獲るものはないからである。しかし、この権威を冒瀆しないこと、久遠に真理を愛するものであること、偽りを語るものを進んで非難し、盗をしないこと、心の中でも不合法の利益を考えないこと、自分の属する派のものには何事も隠さないと同時にその教理の中の何事も他には生命を堵してどんなに脅嚇されても漏らさないこと、その上にその教理をかれ自信授けられたという以外には何人にも伝えないと誓うこと。そして、彼らの派に属する書物を保存し天使の名を守護するなどが新入門者の誓うことであった。彼らはモーゼの律法を厳守した。ローマ軍との戦において彼らは捕えられて拷問され律法者を冒瀆する言を吐くように強いられた。また彼らに禁じられた食物を食するように強いられても一人として拷問人を呪う語を発したり、涙を流すものはなかった。彼らは苦痛の中に微笑を漏らし復活を期待して息を引きとったという。ヨセフォスの『ユダヤ戦争記』にはエッセネのヨハネが指導者の一人と記され、また、エッセネのヨナタンはティムナ地区の指導者に選ばれ、ルッドやジャッファやエマウスもエッセネの指導下に入ったと記してあるがエッセネの教義は絶対非戦主義であったからこのヨハネもヨナタンもエッセネの精神をユダヤ革命のため棄てたのであって最早エッセネではなくなったとさえクラウスナー教授はいつているがこの見解には直ちに肯じ難いところがある。

**ゼーロータイ** ゼーロータイは宗派の一であってパリサイ派のような平和論者ではなかった。また、サドカイ派のように祭司で政治にたずさわった宗派ではなかった。また、エッセネ派のような敬虔な隠遁者でもなかった。ゼーロータイは熱狂者で徒党を組んで全てのイスラエルの敵ヤハーヴェの選民を苦しめてヤハーヴェを冒瀆するものの撲滅を期したものであった。

ゼーロータイはキリニウスのユダヤ人口調査に際して、ガリラヤのユダス一味がローマへの反抗の火蓋を切った時から呼ばれ始めた名である

がゼーロータイの起源はもっと古くユダヤ教に基礎を置いていた。紀元前 166 年のマカビアの反乱は 2 つの動機から起きた。即ち、その守るユダヤ教の象徴としての法典トーラの守護とシリア帝国の羈絆を脱してユダヤの自由解放を獲得するにあった。マカビアのシリア帝国への反抗の意義は永く記憶された。トーラはユダヤ教各派において国民宗教の象徴として自覚されていた。ゼーロータイはヤハーヴェは唯一の法的神であって他は悉く偶像に過ぎないと観、今やこの神の権威は異邦によって冒され、その選民を迫害するに至っては愈々黙してはいられないということになった。マカビア以来 100 年反抗は表面に出なかったがこの思想は漸次民衆の中に発達した。ヘロデ王がマカビア王家を覆がえず気配の見えるに至って俄然トーラに対する狂的守護の熱心が燃え始めた。ヘロデ王が死刑に処したヘゼキア某をヨセフォスは匪賊の頭領と記したがこのヘゼキア某こそはゼーロータイの先駆者ともいうべき人物であった。ガリラヤで反乱を起こしたユダスはこのヘゼキア某の息子であった。亡父の播いた種は既に相当の地盤に根を降ろしていた。ヘロデ王の弾圧、ローマ代官のローマの政策強行はトーラ擁護の決意を同志に堅めさせた。妥協を重ねて保身に汲々たるものトーラ擁護の熱心を欠くものはユダヤ人非ユダヤ人を問わないで攻撃を加えた。大規模な攻勢に出られない間は専らこれらに暗殺と掠奪を以て報いた。ユダスはローマに対する憎悪を子のシメオン、ヤコブ、メナヘムに伝えた。ユダスの孫エリアザルはマサダ要塞陥落までローマに反抗したのであった。ユダヤ戦争は終始ゼーロータイの戦であったが、何れの宗派のものも多少はこの戦に関係した。ヴェスパシアヌスの後ゼーロータイの名は消えているがハドリアヌス帝の時代のユダヤ叛乱もゼーロータイの熱心の燃えたものでローマによる割礼の禁止、エルサレムに異教の神殿の建立されるのを危惧してトーラ擁護のために敢然ローマに戦を挑んだのであった。敬虔なラビ・アキバでさえバルコクバを誤ってメシアーと認めたのであった。ゼーロータイは暴力によってイスラエルの目的を達成せんとして 2 回とも惨敗した。マカビアの成功からユダヤ人はトーラを一層敬ったのであってユダ

ヤ教は各派とも皆トーラを基礎としている。特に、パリサイは精密極まるトーラ解釈法さえ編み出したのであった。パリサイは平和主義で暴力を否定していた。パリサイは宗派としてはゼーロータイに合体しなかった。ローマがユダヤに干渉してから120年、ユダヤはローマの覇権の下にあった。ローマはネロ帝に至って栄華もその頂点を下り西方ゴール、ゲルマンに東方パルシアにその威も漸く揺ぎ始めたかのように思われた。ユダヤ教に改宗するものが西方にも東方にも現われ、アディアブネの女王ヘレナを初めその王子イサデスはユダヤ教に帰依してエルサレムに邸を営んでいた。バビロンではユダヤ人は自治を獲得していた。当時のユダヤ人の多くはイスラエルの崇められる日も近い、神の選民がローマの圧政下に永久におかれる理由がないと信じた。パリサイ律法学者のあるものようにヘレニズム化して非ユダヤ的の傾向を帯びるかエッセネのように隠遁して静かに思いに浸っているかしてはユダヤ民衆からは離れるばかりであった。

神の力が天から顕現して神意に叶わぬものは破壊されイスラエルは外敵から救われ新天地が創造される。ユダヤ人を首位に神の国が実現するというのは民衆の喜ぶ信仰であったであろう。かの終末的予言は民衆の熱烈な願の表現であった。そして、メシアー出現の遅いのに焦燥を感じた狂信徒ゼーロータイは武力だけが終末的予言を実現する手段であり、メシアー自身も武力を用いて異邦人を征服し救を成就するに至ると信じたのである。このゼーロータイを盗財団が利用してゼーロータイの信条さえ竊めたので時には盗財団とゼーロータイは一心同体であるような観を呈しさえした。ゼーロータイ内に隠れて盗財団は富裕階級を掠奪し私腹を肥やし、しかも巧みに民衆の共感と同情を得た。ゼーロータイの前衛シカリ Sicarii 暗殺団の行動はユダヤ革命運動であったか強盗殺人であったか瞭かでない。はじめの頃は相手も主義主張を異にする政敵に限定していた。大祭司も神殿においてシカリ暗殺団に殺され、そのほか親ローマ派のもの暗殺される者多く、時には代官が除こうと窺うユダヤ貴族の暗殺にさえ利用された。民衆はゼーロータイに好意を持っていた。

当時富裕階級と一般民衆との社会的経済的の懸隔は甚しくなっていた。祭司階級は富裕となって墮落し民心を離れていた。ローマ代官は民衆の心情を洞察できないで外に現われた行動をみて秩序維持に名を藉って民衆を圧迫し他面盛んに収賄し民衆を激昂させた。民衆はゼーロータイを革命運動の指導者として仰ぐに至った。民衆の動いたのは反ローマのためばかりでなく、寧ろ、ユダヤ内部の種々な内訌軋轢のためではなかったかと思われる。ゼーロータイの革命運動は無産民衆を加えて勢力を増したがエルサレムにおいてアグリッパ1世の邸を焼き富裕者祭司を襲撃し、その邸に放火したが、その標榜した反ローマ帝国ユダヤ革命は奈辺にその精神を見出すか困難である。ゼーロータイに潜入した過激派が指導的地位に登り盛んに活躍して民衆を煽動し社会変革を画しているのがわかる。ヘレニズム反対の思想運動、ローマ帝国主義への抗争としてだけでは解し難いものがある。そして、遂にゼーロータイはエルサレムを占領した。サドカイ派はじめ有産階級の大部分のものはエルサレムから逃亡した。残る一部は大勢の赴くところ革命派に加わった。パリサイ派はゼーロータイおよび無産者の衆合には参加しなかったが、その地位を利用して革命には一時的にせよ成功した。一般大衆はパリサイ派を支持していた。ゼーロータイ内の革命分子はパリサイのユダヤ的であるのに信頼してその革命政府組織にその功をなさせゼーロータイから一人の革命委員も出さなかった。寧ろ。ゼーロータイ内の過激分子の策動を封じてサンヘドリンに十分な力を振寄せたので過激分子も大衆の動向を観察して沈黙した。過激派は貴族的革命の虚を突く機会を覗いたとも思われた。ガリラヤにおける失敗はパリサイ派に致命的なものがあつた。そして、エルサレムにあったゼーロータイの首領の一人で貴族でもあつた祭司家のエリアザルはこの部下とともに良くゼーロータイの真精神を体得して民衆を指導した。しかし、ガリラヤからゼーロータイの首領ギスカラのヨハネがエルサレムに入って以来形勢は俄然変つた。即ち、ゼーロータイはパリサイ派と別れて互に衝突した。一般民衆はパリサイ派に加担しヨハネ派は漸次圧迫されるようになってエルサレムに集つた民衆と関

係のないイデューミアの同志をエルサレムに引き入れてその援助でパリサイ派を破った。ゼーロータイの過激派の策動であってエルサレムはゼーロータイの手に帰した。しかし、ゼーロータイの最後の目的は神裁政治の実現であって、これがため武器を執り、それがためにヤハーヴェを蔑す富裕階級および私慾を計る祭司を膺懲したのであった。武力は手段であって目的ではなかった。ゼーロータイ内に巢喰う過激派がこのゼーロータイの信仰に満足するわけがない。第2段の策動に移った。乃ち過激派中の最左翼シモン・ベンギオラー派を巧みにエルサレムに迎え入れることに成功した。反ローマ帝国というユダヤ革命の精神は消えて過激派はエルサレムの山手・下町両地域を掌中のものとし掠奪暴行の限りを尽した。ヨハネは神段に抛りエリアザルも神殿の内陣に抛った。何れもローマ軍に対してであった。そして、ヨハネ派は過激派に蚕食されていた。エリアザル派と協調してローマ軍に当ろうとしないでエリアザル派に挑戦してエリアザルに従う祭司らを殺害した。エリアザル派の抛る神殿内の根拠を突いたので同派は全滅した。ローマ軍がティチウスの下にエルサレムに迫った時シモン・ベンギオラー派とヨハネ派は協同したがヨハネ派中のゼーロータイは肅清され全く過激派だけとなった。ヨハネはその名を首領として挙げてはいたがシモンの指導に従わねばならなかった。民衆は訴えるところなく過激派に苦しめられて後ローマ軍に殺害され或は捕虜とされたのであった。この過激派は無産階級を母体として当時の支配階級と抗争したが何等指導原理を有していたものではなかった。過激派に加わった無産者は労働を忌み労働を為さずに富裕者の享樂にあずかることを望んだのであって富裕者を掠奪することを以てその目的を達しようとしたのであった。

エルサレムの落城、ユダヤの没落はゼーロータイの狂信、祭司の墮落、ローマ代官の失政、富裕階級の利己的奢侈等の原因はあろう、しかし、ユダヤ人の生活に蕩々として浸透した商業主義の矯侈は階級の対立を生じ無産階級を自暴自棄にならせるほかなかった。ユダヤ民衆はローマの無敵の権力に効果のない抵抗を試みるか或は過激派に走るか何れにして

も静止する事はできなかった。過激派はエルサレム落城と同時に僅かのゼーロータイとともに亡びた。マサダ要塞におけるシカリ団の自殺はユダヤ過激派の最後であった。しかし、このゼーロータイの伝統は現在のイスラエルに脈々として続いているようである。イスラエル国軍の中堅は建国前からあったハガナ、シュテルン、イルグン団であって実にマカビアのユダヤ復興の独立戦争の指導精神、反ローマユダヤ戦争におけるゼーロータイの精神が連綿として続いて来ているのをみるのであって今日のイスラエルの行動を観察するにはゼーロータイを忘れてはならない。

**メシアー** パレスチナのユダヤ民衆はローマを憎悪した。この憎悪はローマの統治そのものであったがユダヤの宗教もローマを憎悪する因由となっていた。ユダヤ人はローマが聖地を穢し、しかもヤハーヴェの選民の上に君臨しているということには堪えがたい宗教感情を持っていた。それゆえに聖地から異教徒の冒瀆者を機会あれば掃蕩して潔めようとしたのであった。遂にローマに対して乱を起したが功なく解放は人工の手段や自然の成行によってなるものではなく超自然の手段によってのみ遂げられるものとの信仰が強まった。ユダヤ人の「メシアーの時代」*Yemoth hamashiah* とはメシアーの支配が行われる時代をいうのであって、ユートピア的平和と正義の行われる時代が出現するというのであって、ユダヤ人は一日も速くこの時代の到来することを祈念した。勿論「メシアー時代」の内容は各時代によって異なっていた。メシアーとは油注がれたものの意でギリシア語に訳されてキリストス *Χριστός* となった。ローマの支配からいずれは救い出されるとの信仰はユダヤ人がヤハーヴェの選んだ民族であるという信念に基いていた。ヤハーヴェはユダヤ人を世界中の民族から特に選びこれと契約を結んだと信じた。イスラエルは異教の不浄物から遠ざかり、ヤハーヴェに不拔の信仰を持して動じないものとしてイスラエルには輝かしい将来が約束されていると信じていた。エルサレムを中心としてメシアー王国が轄然として開展する。この信仰がユダヤ民衆の心を支配した。メシアーの統治の時代が切迫し

ているとの信仰の形跡は新約聖書の中にも発見せられる。ゼーロータイの多くのものは「メシアー時代」を待ちに待って最早待ちきれなくなってヤハヴェは選民が自らを救うために勇敢に奮闘するのを照覧あって「メシアー時代」の出現を早められるであろうと確信して武器を執ったのであった。「メシアー時代」に最も重要なユダヤ思想の一つは聖書によってもラビの説によってもイスラエルの人々が「イスラエルの土地」Erez Yisrael にかえるという信仰であった（イザヤ書11：11—12）。一般に平和で国は安泰正義が行われること、田園生活の調和と繁栄等で国の政治には天からの干渉が行われて政治的のあがないがある。これは「メシアー時代」の礎石と考えられた「ナフム書1：1—15」（エレミア3：17—18）。国はダビテの末によって再建され黄金時代が訪れて恵と正義と豊作の時代が来る（アモス書9：1—15）。黙示文書によれば「メシアー時代」にはメシアーがイスラエルをローマから解放し最後の審判までこの時代が続くことを述べている。特にエノク書は最後の審判の後メシアーによって新エルサレムが建設されると記して終末思想を展開している。世界の平和と人類同胞感を懐く恵沢の時代が「メシアー時代」の基調であった。

「メシアー時代」の思想はイスラエル史上1世紀および2世紀において重要な地位を占めている。紀元6年ユダヤ国守アケラオが斥けられてユダヤはローマ代官に支配されたがユダヤの熱狂した愛国者たちはローマの統治をメシアー出現の前兆と見做しゼーロータイはヤハヴェーによる王国出現の間もないことを予想した。西紀66年から70年に至るユダヤ革命の時期にユダヤのナショナルストの思想および実践の強化に力を与えたのはメシアー出現が近いとの信仰であった。エルサレムの神殿の喪失後はメシアー出現が近いとの信仰が一般ユダヤ大衆を励ましたのであった。西紀114—15キュレネのユダヤ人がローマに逆ったのも、メソポタミアのユダヤ人がローマ軍の旗色が一時悪いのを見て解放の間近いのを錯覚して動いたのも「メシアー時代」が近いのを予想したと思われる。西紀132年から3年半も続いたバルコクバの反乱も教法師アキバの支援

さえ得たがこれはメシアー出現の信仰に酔ったためであった。

ユダヤのメシアー思想の中に2つの思想が互に混じり合っていた。即ち、政治的・国家的の救済と宗教的・精神的のあがないの思想が錯綜していた。メシアーは王でありあがない主であってイスラエルの敵を蹂躪してイスラエル王国を建て神殿を復興する。同時に「神の国」を通じて、この世界の改善を計り偶像を撲滅し唯一の神のあることを宣言して罪をなくす。要するにメシアーは政治的な英傑であると同時に精神的な英雄でもあるとされた。民衆の間であって民衆の心を知っていた教法師達はメシアーへの期待を煽ったと思われる。「エノク書」「ソロモンの歌」「モーゼの昇天」「第4エズラ書」「バルク書」などは何れも民衆の友をもって任じていた教法師達の作であった。ゼーロータイの蜂起は高位の教法学者ヒレル派の賛するところではなかった。ヒレル派は自由のための戦いといってもユダヤの完全独立が護られるのを疑っていた。ヒレル派は律法の研鑽に比較すれば政治問題は微々たる意義しかないとし、当時民衆の間に流布し信仰となっていたメシアーによるイスラエルの完全独立「神の国」の出現などは夢幻と考えていた。ローマ軍のエルサレム包囲中ヒレル派の教法師ヨハナン・ベンザカイは律法護持のため避難して城外に出た。これは自由を求める心がなかったためではなく律法を護持することによってイスラエルは最後には自由が護られると確信してエルサレムを後にしたのであった。実際にユダヤ戦争が終って残ったのは律法であって神殿を中心としたエルサレムの光栄は物質的に何も残らなかった。ユダヤ民衆はエルサレム陥落という災厄に会ってユダヤはメシアーによってのみ国民が復興することを期待しメシアー思想を一段と飛躍させた。

エッセネの脱世間の生活もゼーロータイの過激行動もこのメシアー出現の待望と信仰から来ているのであってエッセネのゼーロータイとの合体の謎もここにあるように思われる。 (1974. 3. 18)

## Essenes and Zealots

Rokuichi Sugita

Essenes was a Jewish sect formed in the period from the second century B. C. to the end of the first century. Philo and Josephus wrote about them. The members were obliged not to disclose the secrets of the brotherhood. Then, what was informed of them were all second-hand information by the observers from the outside. They were a group of recluses living on the north-western shore of the Dead Sea. They maintained themselves on manual labor and agriculture. They abstained from making any weapons. They were strictly peace-loving people devoting their lives to the observance of the Torah. Essenes opposed to all attempts to bring about by violence.

Zealots was the name of a Jewish religious party in the period between Herod the Great and the fall of Jerusalem. This party was fanatically banded together against all the enemies of Israel to protect the Torah and to secure liberty from the yoke of Rome. And they hated the rich ruling classes and adapted even the means of assassination and robbery. And they resorted to violence.

Essenes and Zealots were Jews and at the same time nationalists. They were easily converted to patriotism when the integrity of the Jewish people were at stake. Essenes coalesced with Zealots and swept into the war, because the both were encouraged by the hope of divine assistance. They conceived of Messiah who would come to bring political independence to Israel.